11課

12月10日

終わりの時の欺き

安息日午後 12月3日

暗唱聖句

だが、驚くには当たりません。サタンでさえ光の天使を装うのです。だから、サタンに仕える者たちが、義に仕える者を装うことなど、大したことではありません。彼らは、自分たちの業に応じた最期を遂げるでしょう。（2コリント11：14、15、新共同訳）

しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。だから、たといサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなろう。（2コリント11：14、15、口語訳）

今週の聖句

マタイ7：21～27、ヨハネ11：40～44、1ペトロ3：18、サムエル記上28：3～25、エフェソ6：10～18

今週のテーマ

現代世界は、超自然的、神秘主義的幻想のるつぼと化しています。ハリウッドは、誤りと欺きが入り混じった宗教的、神秘主義的テーマを扱った映画を何の抵抗もなく制作し、そのるつぼと化すのを助けています。過去数十年のベストセラー小説や映画のヒット作、そして人気ビデオゲームのもとになっているアイデアも、あなたは「決して死ぬことはない」（創3：5）という古典的な嘘（うそ）から来ています。もはや私たちがサタンの魔法にさらされ、その誘惑に引き入れられていることは否定しようもない事実です。サタンはさまざまな姿で現れ、場合によっては科学の姿を装うことさえあるのです。

その中で最も巧妙な惑わしとも言うべきものが、いったん「死んだ」のちに生き返った者が、死後の世界を語る「臨死体験」と呼ばれるものです。多くの人々がこれを霊魂不滅説の証明であると考えています。

今週、私たちは終わりの時代の欺きをいくつか学びます。その中には神秘主義、臨死体験、輪廻転生（りんねてんしょう）（生まれ変わり）、心霊術、先祖崇拝などがあります。これらは警戒すべき危険なテーマではありますが、私たちはその影響から逃れることはできないのです。

日曜日　12月4日　神秘主義

この世界は神秘主義の大きな流れに翻弄（ほんろう）されています。「神秘主義」という言葉は、膨大な思想を一つにした複雑な用語です。宗教的観点から見れば、この言葉は、ある種の霊的経験や恍惚（こうこつ）状態において、個人が神や絶対的な存在と結合することを意味します。特定の教会の礼拝経験の中にさえ見られるものです。その現象の形や強さはさまざまですが、常に見られる傾向は、書かれた神の御言葉の権威を、自らの主観的な経験に置き換えることです。いずれにせよ、聖書はその教理的機能を失い、信者は自分自身の経験以外に頼る無防備な状態となるのです。このような主観的な宗教は、あらゆる欺き、特に終わりの時代の欺きから身を護る防壁とはなりません。

問1　マタイ7：21～27を読んでください。イエスの御言葉の光に照らすとき、霊的な家を「岩の上に」または「砂の上に」建てることは何を意味しますか。

ポストモダンのキリスト教世界では、聖書的な教理の妥当性を、時代遅れの単調で退屈なものであるとし軽視する傾向が強くなっています。キリストの「教え」が、人為的にキリストの「人物像」にすり替えられています。例えば、彼らのキリストの「人物像」からすれば、聖書のある物語は真実ではない、なぜなら、彼らの認識するイエスは、書かれている通りに起こることを決して許さなかったからと主張します。個人的な感情や好みが聖書解釈の基準になり、イエスが言われた岩の上に自分の家を建てること、つまり、聖書が明白に述べている神への従順をあからさまに否定しているのです。

イエス・キリストさえ信じていれば、教理を信じるかどうかは問題ではないと考える人は危険な場所にいます。数えきれないプロテスタント信者たちに死刑を宣告したローマの尋問者たちはイエス・キリストを信じていました。キリストの名によって「悪霊を追い出し（た）」（マタ7：22）者も同様です。「人が何を信じても、それはさほど重要なことではないという態度は、サタンが最も成功を収めている欺瞞（ぎまん）の1つである。人が真理を愛して、受け入れる時、真理はそれを受け入れた人の魂を清めることをサタンは知っている。そのために、彼は絶えず偽教理、作り話、別の福音などを真理の代わりにしようとしている」（『希望への光』1850ページ、『各時代の大争闘』下巻263ページ）。

私たちは、御言葉とは逆のことをさせようとする感情や欲望とどのように戦うべきでしょうか。

月曜日　12月5日　臨死体験

霊魂の無条件の不死説を「立証」するための最も人気のある現代の主張の一つが「臨死体験」です。『かいまみた死後の世界』のなかで、レイモンド・A・ムーディーは、「臨床上の死」を経験し、その後生き返った100人以上の被験者を、5年にわたって研究した結果を公表しました。これらの被験者たちは、生還する前に光りに包まれた愛情深く温かい存在に会ったと言います。これは、「人間の霊が死後も生存していたことの心躍る証拠」（裏表紙より）として見なされています。何年にもわたって似たような書籍が出版され、同じ思想を世に広めているのです（第2課参照）。

問2　列王記上17：22～24、列王記下4：34～37、マルコ5：41～43、ルカ7：14～17、ヨハネ11：40～44を読んでください。何人の復活した人が、死んでいたときの意識の存在について語っていますか。その答えはなぜ重要なのでしょうか。

現代文学に登場するすべての臨死体験は、死んで4日も経ち遺体が腐っていた（ヨハ11：39）「本当に」死んでいたラザロとは対照的に、実際には死んでいない「臨床的な」死であることが考えられます。ラザロも、そして他の聖書中の死からよみがえった人たちも、天国であれ、煉獄（れんごく）であれ、地獄であれ、死後の世界について語った者はひとりとしていません。この事実は、無言に基づく論証ですが、死者の無意識の状態についての聖書の教えと完全に一致しています。

しかし、今日これほど一般に広く詳しく語られている「臨死体験」についてはどのように考えるべきなのでしょうか。私たちが聖書の教える死者の無意識状態（ヨブ3：11～13、詩編115：17、同146：4、コヘ9：10）を受け入れるなら、二つの可能性が残されています。すなわちそれは、極限の状況下で何らかの化学物質が作用して引き起こされた幻覚か、サタンによる超自然的、かつ欺瞞（ぎまん）的な経験（2コリ11：14）である可能性があります。特にそれらの人々が、死んだ親族に会ったと主張しているケースは、サタンの惑わしである可能性がありますが、上記の二つの要因が組み合わさっている場合も考えられます。

このように惑わしが広く行きわたり、多くの者たちを固く捕らえている現状下にあって、たとえ自他ともに聖書の教えに反する体験をしても、私たちは神の御言葉の教えに堅く立ち続けることが何よりも重要なことです。

霊魂の不死についての異教の概念が、聖書的でない霊魂転生や輪廻（りんね）の思想の基礎になっています。この思想は、いくつかの主要な世界宗教にも採用されています。ほとんどのクリスチャンが、死後、天国か地獄に留まる不死の霊魂の存在を信じる一方で、霊魂転生を信じる人々は、そのような霊魂が地上で、何度も死と再び生まれるサイクルを繰り返すと主張します。

また、霊魂転生は、霊魂がその完全を目指す旅のなかで、より高いレベルの知識と道徳を獲得するという、霊的進化の過程であると考える人もいます。ヒンドゥー教では、霊魂は、水生生物、植物、は虫類と昆虫、鳥類、動物、人間、天の住人の六つの世界を、意識の進歩、あるいは「輪廻」（サムサーラ）を通して、永遠に霊魂は転生すると信じています。

問3　ヘブライ 9：25～28 と 1 ペトロ 3：18 を読んでください。もしイエスが「ただ一度」（ヘブ 9：28、1 ペト 3：18）死なれ、同様にすべての人間は「ただ一度」（ヘブ 9：27）死ぬとすれば、なぜクリスチャンと呼ばれる人たちの中にも霊魂転生を信じている人がいるのでしょうか。

多くの人々は、「信じるべきこと」を信じるのではなく、「信じたいこと」を信じるのです。もしある理論が、彼らに実存的な平安と慰めを与えるならば、彼らはその理論を容易に受け入れるでしょう。しかし真剣に聖書を学ぶ者にとって、霊魂転生を受け入れることはできません。

第一に、この理論は、聖書の「霊」の死と肉体の復活の教え（1テサ4：13～18）と矛盾します。

第二に、この理論は、イエス・キリストの贖（あがな）いの働きを信じることを通して、恵みによって救われるという聖書の教理（エフェ 2：8～10）を否定し、人間の業に置き換えます。

第三に、この理論は、永遠の運命は、この世での決断によって永遠に決まる（マタ 22：1～14、同25：31～46）という聖書の教えと矛盾します。

第四に、この理論は、キリストの再臨の意味と実際性（ヨハ14：1～3）を軽視しています。

第五に、人は死んでもなお、〔その霊は生き残って別の〕人生をやり直すチャンスがあるという理論は、聖書的ではありません（ヘブ9：27）。

端的に言えば、クリスチャン信仰には霊魂転生の入り込む余地はありません。

水曜日　12月7日　心霊術と先祖崇拝

古代から行われてきた心霊術は、多くの場合未来の出来事を知るために、生きている死者の霊を呼び出します。一方、先祖崇拝は、亡くなった先祖を崇拝する慣習です。先祖は、死んでもなお家族として認められ、生きている者たちの個人的な悩みに関心を持っていると信じられているからです。これらの異教の慣習は、霊魂の不死を信じる人々や、愛する者たちを亡くした寂しさのなかにある人々には非常に魅力的に映ります。

問4　サムエル記上28：3～25を読んでください。エン・ドルの霊媒の女とサウルの経験から、死者との交信に対してどんな霊的教訓を得ることができますか。

聖書は、古代イスラエルの神権政治において、すべての霊術師、霊媒、魔術師、心霊術師は主の憎むものであり、石で打ち殺さなければならない（レビ19：31、同20：6、27、申18：9～14）と明白に述べています。この律法に従ってサウルは、イスラエルからすべての霊術師と霊媒を取り除きました（サム上28：3、9）。

しかし、主に拒まれたサウルは霊媒（口寄せ）の女に会うためにカナン人の町、エン・ドルに行きます（サム上28：6、7、15をヨシュ17：11、詩編83：11〔口語訳83：10〕と比較）。彼は彼女に死んだ預言者サムエルを呼び起こすよう頼みます。そして心霊術によって現れたと思われるサムエルがサウルと話をします（サム上28：13～19）。惑わす霊は、サムエルになりすましてサウルに次のように語ります。「明日、あなたとあなたの子らはわたしと共にいる」（同28：19）。この惑わす霊は、サウルの死を預言しますが、単にサムエルの姿を装って、聖書的でない霊魂の無条件の不死説を再確認させたにすぎません。それは、サウル自身が以前に取り除いたものよりも、強力な惑わしであることを知るべきでした。

それから2世紀以上の後に、預言者イザヤは次のように書きました。「人々は必ずあなたたちに言う。『ささやきつぶやく口寄せや、霊媒に伺いを立てよ。民は、命ある者のために、死者によって、自分の神に伺いを立てるべきではないか』と」。もし、人々が、神の掟と証に基づいて語らないなら、彼らのうちに光はないのです（イザ8：19、20、同19：3参照）。

私たちは、しばしばストレス下では、間違っていると知りながらも過ちを犯しがちです。信仰、祈り、神の御言葉への服従は、なぜそんな私たち自身に対する唯一の確かな防壁なのでしょうか。

木曜日　12月8日　悪霊の偽装とその他の出現

心霊術と似たものとして、悪霊による死者の偽装とその他の悪霊の出現があります。悪霊は、亡くなった家族、友人、その他誰にでもなりすまし、容貌も声も、亡くなった人そっくりに偽装します。このようなサタンの惑わしは、神の御言葉に堅く立っていない者たちを欺くために用いられます。エレン・G・ホワイトは次のように警告しています。「使徒たちの姿を装った偽りの霊は、使徒たちが地上にいる時聖霊のさしずのままに書いたものと矛盾することを教える」（『希望への光』1869ページ、『各時代の大争闘』下巻311、312ページ）。そしてさらに、「欺瞞（ぎまん）の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであろう」（同1903ページ、同398ページ）。

問5　2コリント11：14、15、エフェソ6：10～18を読んでください。このような悪霊の惑わしに対して、何が私たちの盾となるでしょうか。

使徒パウロは、「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」（エフェ6：12）と警告しています。私たちはこのような惑わしに対して、エフェソ6：13～18に描写されている「神の武具を身に着け（る）」（同6：13）ことによってのみ身を護ることができるのです。

サタンの偽装と出現は驚異であり巧妙です。しかし、それらは神を避け所とし、神の御言葉に立つ者を惑わすことはできません。教理的な見地からも、人間の条件付き不死という聖書的教理を信じる者は、いかなる死者の出現や死者との交信もサタンを源とするものであり、神の力ある恵みによって退けるべきものであることを知っています。もう一度言います。それらの〔霊魂の〕現れがどんなに強力で、説得力があり、本物のように見えても、私たちは常に死者は墓のなかで眠っているという教えに堅く立たなければなりません。

けれども想像してみてください。愛する人を失ったあなたの前に、その愛する人が現れたとします。そして、あなたへの愛を表し、どんなにあなたに会いたかったか、また、あなたにしか知らないことを語ります。さらに、今は地上よりももっと良い所にいると言います。それを聞いた人が、もし聖書が教える死者の状態についての教理を絶対的な拠り所としていないなら、どれほどたやすくサタンの惑わしに陥ってしまうことでしょう。特に、そう「信じたい」と思っていればなおのことです。

金曜日　12月9日　さらなる研究

参考資料として、『伝道』第18章「偽りの科学、カルト、主義、秘密結社に対処する」を読んでください。

亡くなった人との「文書通信、電話通話、ビデオ会議」を可能にする技術を開発している財団があります。そのウェブサイトによれば、人間の死は、単に「永遠の中の次の段階」に進むことであり、「彼らの意識、個性、以前の肉体のおもな特徴は保持され」、死者のいわゆる「脱物質的な人格」を呼び出すことができると言います。しかし最も重要なことは、この「ソウルフォン」財団の関係者が、開発は第三段階に入っており、その技術を使えば現在の物質的人間と脱物質的な人格との交信を可能にすると主張していることです。

その第一段階では、「死んだ家族、友人、各分野の専門家との文字による交信を可能にし」、第二段階では、「永遠の次の段階にいる、愛する人たちとの会話を可能にし」、第三段階では、「〔地上の人間とは〕別の視点から、その分野のすべての可能性を体験している人々と話し、会う」道を開くと言います。

特に恐ろしいのは、彼らがどのようにして、交信相手の死者が本物であるかをテストするところです。サイトにはこう書かれています。「例えば、残された親は、逝ってしまった息子や娘に次のような質問をすることができます。『あなたは子どもの頃、スヌーピーという犬を飼っていましたか』『私たちはあなたの10歳の誕生日にポケットナイフをあげましたか』」。私たちに次の警告が与えられていることは興味深いことです。「時には、霊的存在が、彼らの友人の姿をとって人々の前に現れて、自分たちの生活に関係のあった出来事について話したり、彼らが生きていた時に行ったことをしたりする」（『希望への光』356ページ、『人類のあけぼの』下巻369ページ）。

話し合いのための質問

❶ 文化的なものだからという理由で、多くのクリスチャンが、情報メディアが提供するままに受容しています。特に、明らかに誤りであり、惑わしであるとわかるものに対して、私たちは聖書のどんな原則を指針とすべきでしょうか。

❷ 私たちはどうすれば、私たち自身が同じ惑わしに陥らずに、他の人々がサタンの終わりの時の惑わしに勝利できるよう助けることができるでしょうか。

❸ 多くのクリスチャンが、墓から呼び出された「サムエル」をもって、死者が生きていることの聖書的証拠と考えます。この事は、私たちが聖書の一つの記述や物語だけでそれを聖書教理だと考えるのではなく、そのテーマについて聖書全体から総合的に考える必要があることについて何を教えているでしょうか。

大胆な証人

学期が始まった頃、大学のクラスメートがサンドラ（仮名）に、彼女のノートを携帯電話のカメラで撮らせてくれないか、と頼んできました。「英語で書いているでしょう。ぼくは英語を上達させたいんだ」と、彼は言いました。

中東にあるその大学では、講義は英語で教えられていませんでした。しかし、英語はサンドラの母語だったので、英語でノートを取るほうが簡単だったのです。「どうぞ」と言って、サンドラはノートを開きました。次の日も、彼は写真を撮らせてほしいと言いました。クラスメートが、何日か続けて写真を撮らせてほしいと言ってきたので、サンドラは、ノートをもっと意図的なものにしようと考え、ノートのページの下の部分に好きな聖句を書くことにしました。しかし、次に彼が写真を撮らせてほしいと言ってきたとき、サンドラは大きな恐れを感じました。彼が聖句に気づいて、もうノートを見せてほしいと頼まなくなるのではないか、と思ったからです。彼女は、聖句を用いて神様の栄光を現せるように祈りました。

最初、クラスメートは、聖句に気づいていない様子でしたが、数日後、彼はノートに、教師が講義の間に語っていないことが含まれているのに気づきました。彼は、ページの下の部分を指さし、「これは聖書の言葉？」と尋ねてきました。

サンドラは、「そうなの」と答え、なぜノートに聖句を書いたのか、その理由をどのように説明しようかと頭をフル回転させました。クラスメートは少し黙ったあと、「これは、自分でやる気を起こさせる方法なの？」と尋ねました。

「その通りよ。私は好きな聖句をノートに書くの。それは、いつも私の人生に役立っているわ」と、彼女は言いました。

その日以来、クラスメートはサンドラに、彼女の宗教や信条についてたくさんの質問をしてきました。2人が大学で共に学ぶうちに、彼はセブンスデー・アドベンチスト教会の信条も学びました。学期の終わりに、彼は、聖句でいっぱいの彼女のノートを全部コピーさせてほしいと言いました。そのノートを兄弟と分かち合いたいと思ったからです。

サンドラはその後、彼と一緒に学ぶことはありませんでしたが、連絡を取り合っていて、彼は定期的に、人生についてのアドバイスを求めてきます。サンドラは、彼と家族のために祈っています。彼女は、ノートの下に聖句を書くという大胆なアイディアを神様が与えてくださったことに感謝しています。（リック・マックエドワード）